



おもしろ・てるまさ ●1949年広島県生まれ。1973年広島大学文学部文学科卒業。1978年同大学大学院文学研究科言語学専攻博士課程単位取得退学。博士(文学)。1985年京都産業大学外国語学部講師。助教授を経て、1993年教授。外国語学部長、学生部長、学長補佐、研究機構長、副学長などを歴任し、2014年から現職。専門は印欧比較言語学。



京都産業大学・学長

大城 光正

荒波に挑むトップ
私の改革論

No.37

中長期計画を着実に推進し 「むすんで、うみだす。」大学へ 常に変化する社会に対応しつつ、改革のPDCAサイクルを回す

建学の精神に立ち戻り 将来ビジョンを策定

変化の激しい時代の中で、15年後も「選ばれる大学」であるために本学はどうあるべきか——創立50周年を迎えた2015年に、その問いに対して出した答えが、「むすんで、うみだす。」大学にな

ることでした。

このビジョンは、「学問と社会をむすぶ」という本学の建学の精神にも通じています。校名の「産業」を本学では「むすびわざ」と読み解きます。領域を超えて、人と人、知と知、人と知をむすぶ——そのわざを教授し、むすぶ場になることに、開学以来取り組ん

できました。というのも、大学の使命は「将来の社会を担って立つ人材の育成」にあり、それには「むすぶ」力の養成が欠かせないと考えるからです。これは本学の高等教育に対する不変の姿勢と言えるものです。

世界は今、地球規模の複雑な問題に直面しています。その解決に

することを重視しました。そのため、社会のニーズをふまえて、教育課程や組織の見直しを行っています。

例えば、2017年度に開設した現代社会学部では、リーダーシップ科目やフィールドワークを取り入れ、研究するだけでなく、実際に社会を変えていくリーダーの養成に取り組んでいます。また、経営学部では、イノベーションを起こせる人材に必要な統合的なマネジメント力を養成する教育課程として、^{*2}3学科を1学科に統合しました。

ほかにも、当初計画していた学部の設置や改編などは、この5年間で全て達成しています。そこで今後は、教育の質保証に一層注力していきます。内部質保証を全学で推進する組織を立ち上げるなどして、自己点検・評価の結果を確実に改善につなげ、教学マネジメントを強化する考えです。

多様な研究を推進し 成果を教育に還元

「よりよい教育は、よりよい研究から」と言われるように、教育の質向上につながる研究改革にも取り組んでいます。

2020年4月には、^{*3}3つの研

究センターを新設しました。この目的は、全学部の全教員が研究センターで行われる研究に参画できる機会を増やすことにあります。分野を超えて研究者が結ばれ、多様な知見が組み合わさることで新たな価値が生み出されます。その成果を学部教育を通じて学生に還元していきます。

社会貢献では、自治体などとの包括連携協定の締結に加えて、^{*4}3つの地域に交流拠点を設けています。例えば小豆島の「夢すび館」では、現代社会学部が健康増進や地域産業の活性化をテーマに住民と共に活動しています。その中で、教員や学生に、自分たちの研究を地域のためにどう活用するかという視点が育っています。

さらに、京都市内に開設した「町家 学びテラス・西陣」では、大学の知を地域に還元することに加え、学生の起業家精神を育成することも計画しています。「地域への就職」だけでなく、「地域での起業」という選択肢が増えれば、学生と地域との関係はもっと広がっていくでしょう。

課題を共有し 組織力で改革に挑む

これらの改革は毎年の進捗確

認・検証に加え、中長期計画に基づくPDCAサイクルによって推進しています。

計画期間の15年を5年ごとに区切り、それぞれ改革期、発展期、充実期と位置付け、各期でPDCAサイクルを回しています。改革期の5年が終わり、次の発展期に移行する本年度は、計画進捗の確認とあわせて、「アクションプラン」そのものが、社会の動向や将来のニーズに合ったものとなっています。社会は常に変化しています。次は5年にさらに飛躍するために、計画通りに固執しすぎない柔軟性も大切です。

大学改革の推進は学長1人ではできません。学長をサポートし、改革を推進する体制づくりも重要です。本学の場合、教育研究、社会貢献の領域ごとに副学長を置いています。彼らとは積極的に意見交換する機会を定期的に設けています。

さらに各学部長とは毎月、課題の共有や、教員組織、

あたっては、個人ではなく、人と人が協働し、領域を超えて英知を結集することが求められています。「むすぶ」ことの重要性は、ますます高まっていると言えるでしょう。そのため、建学の精神に立ち戻り、「むすぶ」ことにこだわって徹底的に改革を進めることは、本学の特色を強化し、社会の中での存在感をさらに高めていくことにつながると考えています。

また、「一拠点総合大学」であり続けることは、本学の特色であり、こだわりでもあります。多様な学生が、自分の専門の殻に閉じこもることなく、互いに刺激し合い、時にはぶつかり合いながらも壁を乗り越えていくことで、チャレンジ精神や協働性が培われます。学生同士を「むすぶ」取り組みは、これからもより一層充実させます。

社会の変化に対応して 教育課程や組織を刷新

こうした考えの下、中長期計画「神山STYLE2030」に基づき、教育、研究、社会貢献を通じたビジョンの実現に2015年度から取り組んでいます。

まず教育改革では、常に「時代に合った、質の高い教育」を提供

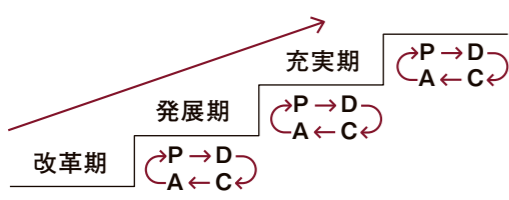
教育課程に関する意見交換などを行っています。その際に私からは、「社会のため」「学生のため」の教育になっているかを、常に問い掛けています。なぜなら、問題意識を常に持ち続けることが、変化への対応には欠かせないからです。

学部間においても情報交換をしておき、問題・課題の共有のほか、教育改善の好事例をお互いに取り入れ合うなどしています。今後は学生の声を改革に生かすしくみも整えていきたいと考えています。

ビジョンは、学内外の人から認められて、初めて実現したと言えます。「むすんで、うみだす。」大学と言われるまで、徹底的に改革を実行します。

注目の経営指標

改革の3ステップ



各期の成果が、確実に積み上がっていくことを経営では重視している。教育改革では改革期に組織改編などを行い、発展期は学修成果の評価を充実させるなど、教育の質保証・質向上を図っている。

^{*2} 経営学科、ソーシャル・マネジメント学科、会計・ファイナンス学科をマネジメント学科に統合
^{*3} 植物科学、ヒューマン・マシン・データ共生科学、こぼの科学
^{*4} 京都府綴喜郡井出町「むすび家ide」、京都府綾部市「綾むすび館」、香川県小豆郡土庄町(小豆島)「夢すび館」

^{*1} 神山は建学の地